



文化力は国境を超える ～ 音楽・映像の力～

講演録 講師：近藤 誠一氏



近藤 誠一 (こんどう・せいいち)

【略歴】

1946年神奈川県生まれ。1971年東京大学教養学部教養学科イギリス科卒業、同大学院法政政治学研究科を中退し、1972年外務省入省。1973～1975年英国オックスフォード大学留学。国際報道課長、在フィリピン大使館参事官、在米国大使館参事官、同公使、経済局参事官、同審議官、OECD事務次長、広報文化交流部長、国際貿易・経済担当大使等を歴任。2006～2008年ユネスコ日本政府代表部特命全権大使、2008年駐デンマーク特命全権大使、2010年～2013年文化庁長官(7月8日退官)。

【叙勲】

フランス共和国 レジオン・ドヌール・シュバリエ章(2006年)(日仏文化交流への貢献)
チリ共和国 ベルナルド・オヒギンズ・大十字章(2007年)(日チリ経済連携協定締結への貢献)
デンマーク王国 ダネブロー勲章大十字章(2010年)(日本・デンマーク友好関係への貢献)

【著作】

『ミネルヴァのふくろうと明日の日本』かまくら春秋社(2012)
『外交官のア・ラ・カルト』かまくら春秋社(2011年)
『文化外交の最前線にて』かまくら春秋社(2008年)

講演の主旨

文化芸術は、国策や外交政策の重要な要素として認められつつあります。それを更に広く世に知らしめるためには、音楽・映像という文化芸術の一翼を担う我々が文化芸術の力=「文化力」について、より深く認識し、それを共有することが欠かせません。

このテーマでお話し下さる講師をお迎えするにあたっては、文化芸術に関連する著書・論文を多数ご執筆され、また、今年、三保松原を含めた富士山の世界文化遺産への登録に多大なご尽力をなされた前文化庁長官 近藤誠一様にお願ひし、大変なご多忙中にも関わらず、ご快諾を頂きました。

お陰をもちまして開催に至りました今回のセミナーが、音楽・映像業界のさらなる発展に寄与することを切に祈念申し上げます。

一般財団法人 渡辺音楽文化フォーラム
理事長 渡邊 美佐

一般社団法人 日本音楽出版社協会
会長 谷口 元

目次

はじめに…………… P2
日本人はどんな心の状態か…………… P2
日本人は心の豊かさを求めている…………… P3
幸福をそれほど感じていないのは何故か…………… P4
アートマネージメントの3つの方法…………… P5
では、国のサポートはどうか…………… P5
文化芸術に十分な時間を割いていない…………… P6
経済優先主義の影響…………… P7
文化芸術の7つの力…………… P7
文化芸術の力が大震災で明らかになった…………… P11
文化芸術は国境を超える…………… P12
文化の力をひとり一人がもっと認識する必要がある…………… P13
音楽芸術の力をこれからの日本再生に生かす…………… P14

みなさま、こんにちは。ただ今過分なご紹介を頂きました、昨日まで文化庁長官をやっておりました近藤誠一でございます。本日は渡辺音楽文化フォーラムと日本音楽出版社協会共催で、この素晴らしいセミナーを開催して頂き、そして、そこにお招きを頂いて大変光栄に思っております。

何しろ昨日 41 年近くの、いわゆる宮仕えを終わったばかりです。今日は初めて自由な民間の立場で話が出るので何でも話そうかと思ったのですが、実は公務員法 100 条というものがあって、公務員であったものは辞めた後も国家機密を漏らしてはいけないという法律です。大した機密は持っておりませんが、それを破ると罰せられますので、あまりきわどい事はお話しできないと思います。

いずれにしても、この 3 年間文化庁をお預かりして、文化・芸術といったものが一体どういうもので、どういう役割を持っているのか、これからの日本にどんな貢献が出来るのか、わたくしなりに考えて参りました。いわゆる大衆芸能、音楽、オペラ、バレエといったもの、そしてまた日本の伝統音楽、伝統芸能、そういったものも幅広く勉強しようと思ひまして、ほとんど毎晩のように、そして、週末も 2 つか 3 つはそういう舞台芸術あるいは美術展に行っていました。

東京というのは本当に色々な文化芸術の機会があって、そして、どの会場に行っても大体いっぱい人が入っておられるのを見て、ほんとに東京というのは非常に恵まれた街だということを感じております。お蔭様で文楽や女義太夫、長唄等、今まであまりご縁のなかったものも、何度か拝見・拝聴する機会がありまして、本当に文化芸術の持っている奥の深さ、幅の広さ、力強さというものを、身をもって感じた次第でございます。

本日はその文化の力というものが、そもそもどういうもので、日本ではそれがどの程度生かされているか、そして、これから音楽を中心に文化芸術に関わっておられる方々に何をお願いし、また国として、あるいは地方自治体がどういうことをすべきか、そのような事をお話させて頂きたいと思ひます。

日本人はどんな心の状態か

まず始めに、日本は今どんな状況にあるか、あるいは日本人は今どんな心の状態にあるのかというちょっとしたデータを集めてみました。よく幸福度ということが言われます。これはなかなか測るのが難しいものがございますけれども、例えば OECD(※経済協力開発機構)という権威のある国際経済機関がございます。そこで昨年出したデータがあります。より良い暮らしの指標ということで、どれ位今幸せな暮らしをしているかというデータです。色々な要素がありますが、ここでは 5 つだけ取り上げてみました。

まず所得や資産。いわゆる個人所得は今、日本は少々下がっておりますけれども、資産を入れる

と先進国 36 のうち 6 位です。教育では 2 位、そして、安全は 1 位。これは誰もが納得するものだと思います。ところが生活の満足度、あるいは幸福度ということになりますと非常に低い地位です。わたくしが 3 年前までおりましたデンマークは、経済面ではそれほどではありませんが、満足度・幸福度は 1 位であります。

もう少し別の角度から見てみます。国のランキングというのでしょうか、経済だけではなくて、社会保障とか教育とかそういったものを総合的に判断して指標化して、ランキングをしているものがあります。国連の UNDP(※国際連合開発計画：国連拡大技術援助計画と国連特別基金を統合し、1966 年 1 月に設立された国連 (UN) の専門機関) という機関が毎年出しているもの、あるいはメディア、ニューズウィークとか、リーダーズダイジェストなどが出しているもの、そういったものを見てみますと大体日本は 10 位前後です。私のいたデンマークも大体同じ位。アメリカはかなり波がありますけれども、例えば住みよい国かといいますと、必ずしもそうではない。治安の問題等があると思います。あるいは競争が激し過ぎる等でしょうか。全体的に見ると、日本はこの 20 年間程経済が思うようにいかないとされておりますが、200 近い世界の国の中で 10 位前後ということです。

ところが先程の幸福度というものをもう少し別の指標で見てみますと、ある大学の教授が行った調査では、178 か国中 90 番目と、ちょうど真ん中あたりです。それから OECD でも真ん中よりずっと下の方ということで、世界で 10 番目位の、客観的に見れば素晴らしい国であるのに、日本人自身が自分をあんまり幸せとっていないということがいえると思います。逆に、自殺率というのは幸福度の反対かもしれません。それを OECD のデータでみますと日本は 3 番目に多いです。年間 2 万人とかよくいわれますが、一番多いのは確か韓国でした。

ということは、これだけ恵まれて安全で住みやすい国とされていながら、日本人自身が、それを十分に理解していない、あるいは、そう思っていないということだと思います。

日本人は心の豊かさを求めている

3

では、それは一体なぜだろうか。この客観的データが示すものと、日本人自身の主観というギャップが一体どこから来るんだろう、というのが当然の疑問になります。戦後働き蜂になってしまって、もう心の豊かさなどはどうでもいい、お金が儲かればいい、仕事をするのが励みだ、という気持ちなのだろうか、というと決してそうではありません。

内閣府が行った調査の中で「あなたは心の豊さとモノの豊さのどちらを希望しますか？」という質問に対して、高度成長期の最初の頃は、いずれも 40%前後でした。次第に心の豊さを求める人が増えてきて、そして、モノの豊かさを求める人は減ってきたことが示されています。特に日常生活の中で文化・芸術を鑑賞したり、文化活動を行ったりすることを、非常に大切だと思っている人が 9 割います。そしてまた、子供の文化芸術体験が重要であると回答した人も 9 割。この種の統計で 9 割

というのは大変に高い数字です。ということは、日本人が文化芸術を通じた心の豊さを非常に強く求めている、ということを示していると思います。

それでは日本人が本当にそういうものを求めているにも関わらず幸せをあまり感じていないのは、そういう心の需要に合致するような供給がないのか、つまり、文化が十分に提供できていないのかという疑問が次に出ますが、決してそうではないことは、みなさんご存知の通りです。

日本には冒頭申し上げましたように、あらゆる文化芸術が、いわゆるクラシックから現代ものまで、かなりハイブローのものから大衆芸能まで、ありとあらゆるものが揃っています。そして、日本人には昔から伝えられてきた、素晴らしい自然観、和の思想があります。また人材も本当に豊富です。例えばクラシック音楽でいえば、若い指揮者・ピアニスト・バイオリニスト達が、毎年のように、コンクールで優勝したりしています。大衆芸能でも、タレント・歌手、あるいは色々なアイドルグループが大活躍をして、それが東南アジア、場合によってはアメリカ・ヨーロッパにも行っております。

スポーツを見ても、なでしこジャパンはちょっと古いですが、若い人が活躍しています。科学技術の分野でも、山中先生のノーベル賞もあります。そして、文化芸術を提供するクリエイターであったり、パフォーマーであったり、そういう人材も豊富です。

それに加えて、いわゆる文化遺産と言われているもの、お寺などの有形文化財、茶道や能のようないわゆる無形文化財と言われているもの、そういったものもふんだんにございます。つまり文化芸術の供給源というものもふんだんにあるということがいえます。

幸福をそれほど感じていないのは何故か

4

もっともっと文化芸術を楽しみたい、それによって心の豊さを得たいという人が非常に増えている、そして、それに見合う、それを供給できる人材が沢山いる。なのに、日本人がそんなに幸福に感じていないのは、なぜなのだろうかという大きな疑問を、私は文化庁に来て以来ずっと感じてきました。

それは、恐らくこういうことだろうと思われます。つまり、需要と供給があるだけでは、それは繋がる保証はないのです。例えば、三ツ星級のシェフがいたとします。そして、おいしいものを食べたいという人がいたとします。その二人が同じ部屋で座っていても、何も起こりません。その三ツ星のシェフが腕を振るっておいしい料理を作り、その美食家が食べるには、レストランのような場が必要でしょう。そして、朝早く築地に行ってい材料を仕入れてくる。素晴らしい包丁で調理ができるいい厨房がある。そして、季節に合ったメニューを作り上げて、それを洒落た内装のレストランで出し、それをホームページで宣伝をしているんな人を惹き付ける。そういういわゆるマネージメント、アートマネージメントともいえると思いますが、そういう供給者と需要者とを繋げるシステムが文化芸術の分野で不十分なのではないか、というのが私のこの3年間でのひとつの結論です。

いい音楽を聴きたい、楽しい音楽を聴きたいという人がいて、素晴らしい歌手やアイドルグループがいた。ではそれを繋ぐのは一体誰か?それが継続的に繋がっていくには誰が何をしなければならぬのか。大雑把にいきますと、次の様な考え方があると思います。

1つはマーケットに任せる。経済学者は需要と供給があればそれは繋がると仰います。従って、いい音楽を聴きたいという人と、いい音楽を提供できる人がいれば何もなくてもそこは繋がると。色々なプロダクション、楽団、レコード会社、あるいは音楽出版社も入るでしょう、そういった一種のソフト的なものと、劇場や美術館のようなハード、そういったものがあれば本来は需要と供給が十分に繋がって、国民は皆ハッピーになるはずで。しかし、実はなかなかそうはいかない。ものによってはコストの方が高くなってなかなかコマーシャルベースでは立ち行かなくなることがあります。

そういう時には2つの方法があります。ひとつは、国とか自治体が様々な助成をする。様々な形のサポートをすることで、それが経済的に成り立つようにする。あるいは、いい音楽を聴きたいがチケットが買えない人が安く音楽を聴きに行けるようになる、あるいは子供たちにより良い機会が学校で与えられる。そういった事を行うのが恐らく公、つまり官の役割だと思います。同じような事は、実際に音楽関係の会社だけではなくて、いわゆる財団であるとか、企業がメセナ活動（※企業が主として資金を提供して文化、芸術活動を支援すること）を通じて、利益の一部を社会に還元するという形でも実現できます。文化芸術への需要と供給がちゃんと繋がるようにする、例え採算が合わなかったとしても、いいものであり、望む人がいるのであれば、それが成立するような助成をするというシステムが望ましいかと思います。

では、国のサポートはどうか

では、日本では、国家と自治体等の官と民が、どの程度のサポートをしているんだろうかというのが次の疑問になろうかと思います。そこでまたいくつかデータを探してみました。主要国の比較をみます。国家の総予算の中でどれ位の比率が文化予算に向かっているかということです。我々の予想通りですが、フランスは1%を文化に使っております。韓国も今それに迫っております。どんどん増えております。他方アメリカ、そしてイギリスもそうですが、いわゆるアングロサクソンの方々は、文化というのは下手に政府が介入すべきではない、心の自由の問題にも通じるし、国が中身をコントロールすることは罷りならない、民間に任せるべきだという思想を持った方々ですから、当然ながら国の予算が低くなっております。次に、GDPに占める寄付、これは丁度いいデータがなかったので、寄付全体でするので文化芸術だけではありませんけれども、大まかな感じは掴めると思います。アメリカは当然ながら大変な金額が寄付によって賄われている、寄付によって文化芸術が支えられていま

す。これは財団であったり、個人であったり。イギリスもそれに近いですね。他方フランスは寄付ではなくてほとんど政府が面倒をみています。非常に国の方針がはっきりしていると思います。

では日本はこのどちらのパターンだとお考えでしょうか？ 国がそれなりに役割を果たしているのか？ 寄付がある程度の役割を果たしているのか？ 実は、大変さびしい限りですが、国の予算の0.1%位しか文化に回っておりません。寄付も非常にまだまだ少ないです。東北の大震災以来、いくらか寄付文化が根付き始めたように思いますが、まだまだ国民ひとり一人、あるいは企業が、この国を支えるのは自分達だと、自分たちが役割を持っているんだという意識が乏しいのだろうと思います。それでは、自治体はどうでしょうか。自治体の文化関係経費の推移を見ても、右肩下がりで明らかに減っています。地方は苦しいといわれていますが、それはまず文化予算のカットから始まっています。企業のメセナ活動はというと、一時期少し増えましたが、その後停滞気味で、最近アベノミクスがどの程度効果を持っているか分かりませんが、その前まではリーマンショックもあって更に下がっております。つまり政府も自治体も企業も極めて不十分な支援しかしていないということが言えると思います。言い換えれば渡辺プロダクションのようなマーケットで活躍している方々に非常に頼っているということではないでしょうか。

文化芸術に十分な時間を割いていない

7

そこで個人個人が文化芸術をどのように考えているのか。先ほど需要はあると申しあげましたけれども、実際にどれ位文化芸術に時間を割いているんだろうかという疑問が沸きました。個人の生活においてどれ程レジャーに時間を割いているかという OECD の調査がありました。レジャーというのは音楽を聴きに行くだけではなくて、旅行等もあるかもしれませんが、それを見ますと驚くことに日本は2番目に低いですね。ベルギーとかドイツとかヨーロッパは非常に多くの時間をレジャーに費やしています。日本はメキシコに次いで低い。ついでに睡眠時間というデータがあったのでそれを見ますと、全く同じように2番目に睡眠時間が少ないです。韓国が一番寝ていない。その次が日本。それでは日本人は、一日のうちレジャーに使う時間も少ない、寝る時間も少ない、一体何をしているのだろうか。仕事をしているのか、と思うのですが、実労働時間という定義がややこしいですけれども、どれくらい働いているかという統計があります。同じ OECD です。日本は OECD 平均とほとんど変わらないですね。そんなにしっかりと仕事をしている訳でもない。寝る時間を惜しんでレジャーもしないで、あんまり働きもしないで、一体どうやって暮らし、過ごしているのだろうか？ という疑問に至りました。答えはありません。何となくダラダラとオフィスであまり利益の出ないことをやったり、マンガを読んだりしている人もいますけれども、その辺はデータもないので分かりません。とにかく個人は心の豊さを求め、そして、文化芸術は大事だと思っていながらなかなか十分な時間を割いて文化芸術を楽しもうとしていないのです。

強い需要があり、供給されるべき人材もある。ではなぜそのマッチングが十分に出来てこなかったのだろうかという、当然戦後に経済を優先してきたからとも言えると思います。それが成功して世界第二の経済大国と言われたがゆえに益々、そのお金中心の物質主義、そして効率主義に走ってきたように思います。そして、その後進んできたグローバル化によって、短期に成果を挙げなければならない、会社側も赤字であればすぐに黒字にしなければいけない、長期的な投資などなかなかやられていけないという状況になっていきました。そういう状況の中では、国全体のレベルでのアートマネジメント、つまりいい音楽を聴きたい人に、才能を持った人たちの芸術芸能を届けるような、マッチングのシステムを国家や政府といった国全体だけではなくて、民間も含めてつくってこなかった。そもそもそういう発想が十分なかったのではないかと。ともかく経済、経済、すぐに儲かるものでなければいけない、そんな雰囲気あまりにも強かったように思います。そうなってくると文化芸術というのは、そんなに役に立つものではないということになってしまいます。日本と全く違って、フランスやヨーロッパ全体では、文化芸術は本当に国にとっても個人にとっても大事なものであるという認識が定着しています。しかし、日本では何となく文化芸術はお金と暇のある人が楽しむもので、贅沢な消費だという気持ちがまだまだ心の奥に残っているような気がいたします。

そうなるに当然ながら一昨年の 3.11 直後の自粛ムードが起こる訳です。あの頃は、東北の方々が苦しんでいる時に音楽なんてとんでもないという気持ちが日本中に蔓延しました。しかし、実際には、もし音楽あるいは文化の力を信じていれば、こういう時こそ音楽の力を使って、我々が団結し、東北の方々にいい音楽を届けようと、心を慰めてあげようと、勇気づけてあげようとなったはずですが、実際は全く逆でした。そう思った方々は沢山おられたとは思いますが、そういう方々が声をあげられないような、暗いムードが日本全土を覆っていました。

文化芸術の7つの力

それでは、実際に文化芸術にはどういった力があるのか。これはなかなか分析するに難しい分野ですが、この3年間で私なりに整理したいくつかの項目についてご説明したいと思います。

1) 感動、悩み、祈り、感謝の表現と共有

まず文化芸術というのは、ひとり一人が持っている感動や悩みや祈り感謝の念、そういったものを表現する、そしてそれを他の人と共有するという力があると思います。「ラスコーの壁画とネアンデルタール人との違い」ですが、ラスコー洞窟の壁画を、名前だけはお聞きになった方も、あるいはご覧になった方もいるかと思いますが。南フランスのドルドーニュ地方というところにある洞窟です。そこ

に1万数千年前クロマニヨン人という我々の祖先が、素晴らしい壁画を描きました。牛などの動物の絵が多かったのですが、その絵を見て本当に度肝を抜かれました。まだ氷河期が終わってなくて、外には野獣のうなり声があり、寒く暗い、飢えに苦しみ渴きに苦しんでいる。なぜこんな時代に、そういう人達がこんな芸術を描いたのだろうか。とっさに思ったのは、何か人間には苦しい時辛い時、あるいは嬉しい時、それを表現したいという衝動のようなものがあるのではないかと。そして、それを表現させてくれる、その出口になるのが芸術・文化ではないかと、そう思いました。

その話を申し上げた時に、ある文化人類学の先生が、実はクロマニヨン人の前にいたネアンデルタール人という原始人、かなり猿に近い人間ですが、ネアンデルタール人が滅んだのは、彼らにはお互いにコミュニケーションする能力がなかったからだという説があるということを言われました。つまり自分を表現出来なければ相手に伝わりません。ネアンデルタール人にはそういう能力がなかった。従ってお互いに情報交換も出来ない、危険を知らせ合うことも十分出来なくて、それで滅んでしまったというふうに考えられているようです。それから見ればこのクロマニヨン人というのは、どういう気持ちで牛なら牛を描いたか分かりません。最近の収穫に感謝する気持ちで描いたのかもしれませんが、また、明日いい獲物が捕れますようにという祈りかもしれません。あるいは子供が生まれる、健康に生まれてくるようにという願いかもしれません。いずれにしても心の中にあるものを何とか表現しようとして、記録が残っていないからわかりませんが、ドラムを叩いたりしたこともあるでしょう。壁画は人間が根源的に持っている表現したいという気持ちを表しているのだらうと思います。それと若干関連しますが、文化芸術は個人に生きる力、あるいは幸福感を与えます。

2) 生きる力と幸福を与える

ここに色々な言葉を引用してございます。最初に、江戸時代の有名な禅のお坊さんの白隠禅師(※臨済宗中興の祖と称される江戸中期の禅僧)は、「坐禅和讃」というお経の中で、何かに感動し喜ぶことによって幸福が得られるんだという主旨のことを言っております。

有名な紀貫之は、「力をも入れずして天地(あめつち)を動かし、目に見えぬ鬼神(おにがみ)をもあはれと思はせ、男女(をとこをむな)のなかをもやはらげ、猛きもののふの心をも慰むるは歌なり」と古今和歌集の仮名序に書いています。歌は全ての芸術と置き換えても良いかもしれません。メロディのある歌も当然入ると思います。これは私もよく実感するところでございます。「男女の仲をも和らげ」とありますけれども、例えば朝夫婦喧嘩をして外出しても、夜一緒にコンサートに行くと仲直りが出来ます。何となく音楽を聴くと心が和らぎ夫婦喧嘩もお互いに忘れるということだらうと思います。

オスカー・ワイルドも同じような事を言っております。かなり皮肉が得意な人ですけども、人間には2種類あり、単に動物の様に生きている人と、文化を味わって生活している人。英語で“exist(存在している)”と“live(生活している)”という言葉は彼は使っていますが、単に存在するだけの人と、人間として生きている人という両方の人がいるということを行っています。多分これはいわゆる文化芸

術をしっかりと味わって、その文化芸術の持つ力を生きることに使っている人のことを「生活している」と彼は言っているのだらうと思います。

引用をいくつか見てみたわけですが、これはみんな文化芸術を生業とした、中心とした方が言っているのだから、それは当然だらうと思われるかもしれませんが。自分が好きな文化芸術に力があると言うのは当然であらうと。客観的、科学的に文化芸術には力があると本当に言えるのだらうか？それが私のずっと疑問でした。自分は好きだし、いい音楽を聴けば元気になるけれども、本当に客観的に正しい事なのだらうかと。誰にでも適用されるのだらうかというのがずっと疑問でした。

ある日筑波大学の分子生物学の大家といわれている村上和雄先生という方に話を聞きました。その先生によりますと、人は感動すると、特に嬉しい、いい音楽を聴いていいなあと思ったりすると、それによって遺伝子が活発になるのだそうです。その先生によると遺伝子というのは沢山ありますが、普段はその2%しか使われていないらしく、98%は普段は眠っているそうです。ところが感動すると眠っている遺伝子のうち特にポジティブなものといひましようか、疲れを取るとか、病気を治すとか、そういう力を持った遺伝子が目覚めて活動する。だから感動すると、病気が治ったり元気になれたりもするし、それは現在臨床的に証明されているんだということを仰いました。落語を聞いていればガンが治るという話はよくいわれていますが、これはあながちウソではないのだらうと思います。このことはアメリカの糖尿病学会が目撃して、糖尿病患者の方々に音楽や笑い、エンターテイメント等を聴かせると、患者の方々の血糖値が下がったということです。つまり楽しく、笑い、歌っていると、その良い遺伝子が目覚めてそして病気を治していく、血糖値を下げていく、そういう力があることがほぼ科学的に証明されたそうです。なぜそうなるのかは分からないけれども、そういう力があることはアメリカの学会も認めています。心というものが何であるのかというのは未だに生物学者も医学の先生もそれから脳心理学の先生も分からないと言っています。しかし心とは何か全く分からなくとも、心の動きが体に影響を与える。肉体に影響を与える。これは色々な臨床実験で分かっているということです。ですから、文化芸術や音楽が、個人に生きる力や病気を乗り越える力、そして幸せ感を持つ力を与えてくれるということはほぼ間違いないということです。

3) 社会的役割～意見の違いも尊重する心を育む～

次は、社会的な役割。文化芸術はコミュニケーション能力、あるいは連帯心というものを養ってくれると思います。例えば学校で算数の授業を習い、テストをやる。そうすると自分が良い点を取ろう、つまり常に競争で他人を蹴落としていくという気持ちになります。人とあまり対話をしないで一所懸命勉強して良い点を取ろうということになります。それはそれで大事な事かもしれませんが、しかし、人間が社会に出て暮らしていく上で重要なのは、自分と意見の異なる人と、どうコミュニケーションしていくかです。お互いを分かりあって、一緒に出来る事を一緒にやり、意見の違いはお互いに尊重する。そういう環境を育てることが必要です。それは数学や物理学を勉強しても達成できません。やはり

文化芸術を通して初めて、そしてそれを子供の頃から実践することで自分のものになるかと思います。そうすればお互いに協力し合う社会の連帯ということも生まれてくると思います。

4) 経済効果

これはもう一番分かりやすい。ご説明するまでもないでしょう。地域振興、産業振興あるいは観光支援になると、更には先程のようなやる気が起きてくれば当然企業におけるイノベーションにも役立つはずです。

5) 既成概念・固定観念の打破

野依先生というノーベル賞を化学の分野で取られた先生（※野依良治-ルテニウム錯体触媒による不斉合成反応の研究が評価され、2001年にノーベル化学賞を受賞）がいつも言ってらっしゃいますが、もし自分の子にノーベル賞を取らせたければ学校の学科の勉強をいくらやらせてもダメだと。芸術をやらせなさい。芸術をやることでひらめきや日常的な約束事・常識等から自由になって、伸び伸びと新しい発想が出来る。そうでなければノーベル賞はとでも取れない。学科の積み上げではダメだと。既成概念や固定観念を打ち破る力が必要で、それは芸術をやることによってしか与えられないということをよく言っておられます。

6) 国際的な役割

それからもう1つは、国際的な役割というのでしょうか、日本は政治も経済もあまり世界で話題になりませんが、文化は大変な人気です。私も先週パリに行ってまいりましたが、丁度ジャパンエキスポをやっていました。ものすごい人でビックリしました。大きなホールが本当にぎっしり人で埋まって、しかも単にマンガとアニメとコスプレだけではなく、そこには寿司屋もあり、伝統的な舞踊ですとか、忍者や、ゆるキャラ”くまモン”もいました。ありとあらゆる日本の文化、生活文化といえるお茶やお花、色んな展示があって沢山の人が来ていました。

今、日本と言えば文化、文化と言えば日本。つまり日本の国際的地位を、あるいは日本人への理解を大いに深めているのが文化だといえます。それを国際政治学者のジョセフ・ナイという人はソフトパワーと呼んでいます。それに対して、軍事力は相手を物理的に破壊する力で脅して、経済力は相手をお金で釣って言うことを聞かせる、相手を強制するという意味でハードパワーだと。しかし、文化は相手が好きになって「日本が好きだ、日本人は素晴らしい。」と感じて、その結果こちらに、なびいてくるといいますでしょうか、こちらの気持ちになってくれる、それがソフトパワー。これからはそれが大事だということを繰り返し言っています。そういった力を与えてくれるのはやはり文化です。

先程申し上げました固定観念からの脱皮。これは今の日本に一番必要な事ではないかと思います。戦後色々なレジーム（※制度や慣行）が出来ました。安倍さんは戦後レジームからの脱却とか言って

います。今の日本では、ああしてはいけない、こうしちゃいけない、経済成長が第一だなど、色々な目に見えない縛りの中で我々は思うように生活が出来ていないように思えます。そういうものから芸術の力は我々を解き放ってくれると思います。

7) 日本人の思想、先人の知恵の伝授

昔から日本人が持っている思想、価値観、先人の知恵、そういったものを我々に伝えてくれるのも文化芸術です。伝統芸能を見れば元気になると同時に「ああ、日本人ってこういう風に生きて来たんだ」義理と人情の相克やぶつかり合いをこのようにして日本人は処理してきたんだな、ということが分かります。それが今すぐ役立つかどうかは別として、正解のない問題にどう日本人が対処してきたか。それを教えてくれるのは伝統芸能だと思います。

このように文化芸術を色々考えてみますと、単にひとり一人を元気にするというのではなくて、社会をまとめ、経済を活性化し、国際的なイメージを上げる。そして、ひとり一人が持っている能力がより良く出てくる。そういうような力があるということが分かってくると思います。これは財務省に行つて、「だからお金をもうちょっと下さい」と言ってもなかなか分かってくれません。分かっても分からないふりをしているのかもしれませんが、そこで起こったのが 3.11 の大震災でした。大震災で今申し上げた 7 つの文化芸術の力が色んな形で証明されたのではないかと思います。阪神淡路大震災の時も若干そうでしたが、今回はそれ以上に文化芸術の力が発揮された、あるいはその重要性が認識されたと思います。

文化芸術の力が大震災で明らかになった

10

3.11 からほぼ 2 週間経って、本当にまだまだ自粛ムードでちょっとでも劇場が明かりを点けているとクレームが来る、抗議の電話がかかってくる、嫌がらせの手紙が来る、そんな日が続いておりました。そんなある日たまたま池袋であったクラシックのコンサートに行きました。

そこでは、ショスタコーヴィチの第五番というシンフォニーを後半に演奏しました。後半が始まる時に指揮者の方がこれから演奏する曲はショスタコーヴィチが本当に辛い生活を送りながらそれを何とか乗り越えようとして頑張った、それを示す音楽です。これを聴きながら東北の人の事を思い我々の気持ちを届けましょうというような話をしました。そして、後半の音楽が始まりました。本当に水を打ったようなシーンとした静けさの中で、音が鳴り始めました。そのオーケストラで一所懸命弾いている人たち、そしてそれを観ている観客の間に、何か目に見えない心の繋がりが沸きあがってくるのを肌で感じました。100 人位のオーケストラと 2000 人位の観客が本当に心をひとつにして東北の方々に思いを馳せているのが手に取るよう分かりました。そして、終演後、出口に並んでいた楽団員

の持っている募金箱には大勢のお客さんが列を作りましたが、その顔を見ていると、何か安堵感のようなものがありました。恐らくそれはこれまで2週間の間毎日のように厳しい映像を見て心を痛めながらも自分には何も出来ない、送るお金もない、仕事をサボって応援に行くことも出来ない、何かしたいけど自分には何も出来ない、そういう悔しさや情けなさがあったかもしれません。しかし、そのコンサートで2,000人全員が心一つにして、東北に心を届けたんだという、その気持ちを若干の寄付で物的なものに変えた。自分は少し何か出来たという気持ちがあった故に、安堵といっっては大きいかもかもしれませんが、何か少しほっとした気持ち站了起来。それを見て「音楽にはそういう力がある」、自分が普段なかなか表現出来ない気持ちを表現する手段として、また人と心を合わせる手段として音楽には素晴らしい力があるということを感じました。

それから生きる力と幸福を与えるという文化芸術の2つ目の力ですが、これはもう何度も新聞記事にもありましたし、色んな歌手の方々が現地に行って感じられたと思います。いい歌を聴いて本当に涙を流して辛い時期を忘れた。その歌を聴いたからといって食べ物が手に入るわけでもないし、明日職が手に入るわけでもない、雨露がしのげるわけでもない。でもいい歌を聴くと本当にホッとする。一時的とはいえあの辛い思いを忘れる、そういう事を経験された方は大変多いと思います。それから社会的な結束ということを申し上げましたけれども、色んなところで東北の各地に伝わる伝統芸能、御神楽のようなものが水に流されましたが、それらを作り直し、そして、数百人の小さな村の人たちが伝統芸能をやることによって「俺たちは仲間なんだ」、「俺たちはこの地域で生まれて育った人間なんだ」という気持ちを取り戻して元気になったという話もあります。経済効果もちろんそうです。松島のようなところは観光資源として役割があったということが分かりました。そして、被災者の方々の素晴らしい秩序だった行動、これは決して意図したものではありませんが、それが「日本人は素晴らしい」と、こんなことがあったのに一糸乱れず行列を作っているじゃないか、やはり日本人はすごいんだということを世界中のメディアが激賞しました。

それから固定観念からの脱皮とか、先人の知恵を伝えてくれるのが文化芸術だという点でいえば、復興というのは単に道路や家を元通りにするのではない、文化のある町を造らなければならないということを沢山の方が言うておられます。そしてまた、これまで無視してきた碑文等に、実はここより下に家を造ってはいけないというメッセージがあった。貞観の大震災とか、古人の知恵が残っていたことに気付いたんですね。科学の力があれば何でも出来ると我々は2～300年間思い込んできましたが、実はそうではない、そういう古人の素晴らしい知恵が詰まっているのが文化財だというのが改めてここで分かったわけです。

文化芸術は国境を超える

11

そして、文化芸術は国境を超えるというのは釈迦に説法だと思いますが、そもそも文化芸術とくに

音楽というのは言葉ではなくて、感性から感性に伝わるものです。それは当然言語とか宗教、民族、国境を超えて伝わります。戦後、特にこの20年、30年世界的に民主主義が広がりました。そしてまた、中国・ブラジル・ロシア・インドのように、ちょっと豊かな贅沢の出来る中間層が何億人、何十億というペースで増えました。そういった方々が買うものを求めるのは、やはりエンターテインメントであり、文化芸術です。そこに巨大なマーケットが出来たという事、それも重要な事だと思います。そしてまた、IT 技術によって瞬時に色々な情報が伝わる、音楽も伝わる、動画も伝わるということで非常に手軽に安価に迅速に情報が流れるということで、文化芸術というものがものすごく大きな役割を果たす、そういう素地が出来たのだらうと思います。しかもグローバル化がどんどん進むことによって、みんなひとり一人が大変な危機感を持っています。競争、競争で自分を見失いつつある人が世界中で増えています。そういう人にとって心の安らぎは重要です。自分はやっぱりこういう組織にいたんだと、自分はこの音楽に、この芸能に代表されるような社会の中で生きてきた、そこに自分はいるんだと、そこが自分のすみかである、最後の拠り所なんだという気持ちを求めている。そういう人が増えている。だから、文化芸術、音楽がどんどん広まっていく、もう国境は全くないと言ってもいいと思います。

文化の力をひとり一人がもっと認識する必要がある

12

それでは最後にそういう状況の中で今後の我々は、政府は、組織は、民間は、何をしたらいいのか。何をすべきなのか。

まずは先程から申し上げているような、文化芸術には個人を勇気づけ、社会をまとめ経済の活性化をし、国のイメージを上げる、固定観念から脱皮出来る、そういう力があるという事をもっとひとり一人が認識をし、それを自分のものにしていくという、その努力が必要ではないかと思います。

そして、それを実現させる為には、先ほどから申し上げているようなマッチングが必要です。色々な規制があるとは聞いていますが、特に当座一番大事なことは文化芸術の市場を活性化することです。政府や企業が、クリエイターやシンガーやパフォーマーと観客とを結びつける様々な工夫をする。ここをもっとしっかりしていかなければならない。さもなければタレントは外国へ逃げてしまう。これは特に欧米クラシック界ではかなり深刻な問題にもなりつつあります。

そして著作権の問題は大変深刻でしょう。著作権の問題をしっかり解決しなければ、音楽なら音楽の市場というのは、コマーシャルベースでなかなか成り立ちにくいと思います。ここは国が中心となって新しい制度に向かって進んでいかなければいけないと思います。残念ながら私は3年間で著作権についてはあまりこれといった貢献が出来ませんでした。これから益々ジャスラック等を中心に著作権の問題に取り組んでいくと思いますが、政府としても是非出来る限りのサポートをしていきたいと思っています。いきたいというより、私は今日から民間人ですから、行って欲しいと思います。今回三保松原で経験した力を使えるならばジャスラックをお手伝いしたいと思います。

それから新たなマネジメント、繋ぐ色々な助成を含めて役割を強化していく。そして、政府だけではなくて、基本的には市場の力、プロダクションや楽団等が行うアートマネジメントを、やはり国が、あるいはそれ以外の機関が、協力をしてサポートしていかなくてはいけない。誰かがやればいいというものではないと思います。関係者それぞれが自分の持ち分を發揮して協力していくことで文化芸術の力が日本の隅々まで行き渡っていくと思います。

音楽芸術の力をこれからの日本再生に生かす

13

そしてまた、地方。どうしても東京一極に集中になりがちです。冒頭申しましたように、東京にはありとあらゆる文化芸術が溢れています。地方に行くto決してそうではありません。もっと地方にもいい音楽やいい美術がいくことが必要で、また地方は地方で、その地方に伝統的に存在する文化的、伝統的、歴史的な魅力をもっと再発見し、それを生かすことで新しい魅力をつくって多くの人を招く。そして、大都市に行ってしまった若い人を取り戻す。そういうことがこれから必要になってくると思います。

これからは誰かが何かをやればそれで済む時代ではありません。国も自治体も企業も、そして、音楽であれば音楽の関係者の方々がそれぞれの力をフルに使って、固定観念に閉じ込められることなく自由な発想で協力をしていくということで、音楽芸術がもつ素晴らしい力を、この日本のこれからの再生に生かしていく。そういう時期に来ていると思います。ここにおいでの皆様方にはそれをして頂ける十分な力と責任もあると思います。この機会に是非日本全体が、文化芸術の力をより一層認識し、それが国民ひとり一人の心の隅々まで行き渡るような仕組み作りに協力して頂きたいと思っています。私も新しい立場で出来る限りの事はしていきたいと思っています。

時間でございますので、私の話はここで終わりとさせていただきます。どうもありがとうございました。

文化力は国境を超える～音楽・映像の力～

2013年10月31日

[編集・発行]

一般財団法人 渡辺音楽文化フォーラム / 一般社団法人 日本音楽出版社協会

[開催日]

平成25年7月9日(火) 於：ホテルフロラシオン青山 3F 「孔雀」

講師：近藤 誠一氏

※この講演録の内容についてその全部もしくは一部の無断転用を禁じます。[お問合せ先]一般財団法人渡辺音楽文化フォーラム 03-5428-2677

